



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 支援の現場で学んだ人チーム・世界の変え方

講演： 鬼丸 昌也氏
レポーター： 赤堀 薫里

鬼丸 昌也氏プロフィール

認定NPO法人テラ・ルネッサンス理事・創設者。1979年、福岡県生まれ。立命館大学法学部卒。高校在学中にアリヤラトネ博士（サルボダヤ運動創始者/スリランカ）と出会い、『すべての人に未来をつくりだす能力がある』と教えられる。2001年、初めてカンボジアを訪れ、地雷被害の現状を知り、「すべての活動はまず『伝える』ことから」と講演活動を始める。同年10月、大学在学中に「すべての生命が安心して生活できる社会の実現」をめざす「テラ・ルネッサンス」設立。2002年、（社）日本青年会議所人間力大賞受賞。地雷、子ども兵や平和問題を伝える講演活動は、学校、企業、行政などで年100回以上。遠い国の話を身近に感じさせ、ひとり一人に未来をつくる力があると訴えかける講演に共感が広がっている。

【著書】『ぼくは13歳 職業、兵士』合同出版 2005年

『こうして僕は世界を変えるために一步を踏み出した』こう書房 2008年

『僕が学んだゼロから始める世界の変え方』扶桑社 2014年

【公職】日本小型武器行動ネットワーク 運営委員 <<http://jansa.jp/>>

公益財団法人 京都地域創造基金 理事 <<http://plus-social.jp/>>

特定非営利活動法人 京都子どもセンター 理事 <<http://www.kodom.com>>

テラ・ルネッサンスは、2001年、私が立命館大学の四年生の時に一人で設立しました。今年で19期目に入ります。現在日本人職員が17名と外国籍の職員が72名。年間予算が約2億5千万円。主に寄付と定額の会費と、国際UNDP国連開発計画からの助成金などで活動しています。主な支援対象は紛争で痛みや悲しみを得た人々、例えば元子ども兵、地雷の被害者や、紛争下で性的暴力を受けた女性たちです。

自立支援とは、自らに変化する力があり、自らの地域にも変化する力があるという、そのことに気付いて自ら変ろうとすることが自立で、私たちはそれをサポートするために職業訓練、仕事の技術の提供をします。識字教育や、スモールビジネスのためのマイクロクレジット、自分たちで変ろうとする力を引き出すための支援を、現在、世界6つの国でやっています。アジアは日本、岩手県大槌での復興支援と、カンボジアと、ラオス。アフリカは、コンゴ、ウガンダ、ブルンジ。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

2004年2月に初めてアフリカのウガンダへ行きました。ウガンダの北部では、当時、ムセビニ政権と、神の抵抗軍が23年間北部で戦闘していたため、日本の外務省から退避勧告が発令されていました。ゲリラが子どもを誘拐して兵士にする。23年間で誘拐された18歳未満の子どもの数が36,000人に上りました。2008年に、下は12歳から上は28歳まで、8人の元子ども兵士に会いました。子ども兵とは、子ども時代に兵士にさせられた人たち、もしくは武装勢力に支配をされていた人たちです。学校には行けず、文字の読み書きや、就業するための技術訓練を受けていません。肉体的に大人になっていても、社会復帰するためには、もう一度なんらかの支援が必要になります。

私はある少年兵と出会いました。彼は12歳の時にウガンダの武装勢力に誘拐されました。人は社会的な動物なので、どうすれば周囲に承認されるか、その承認基準に沿って行動していく。だからこそ、子どもたちに訓練をして、自分たちの村を襲いに行かせて、その残虐な行為によってその子どもたちを精神的に縛り上げるわけです。それで脱走を防ぐ。それにはコストが一切掛からない。

彼も生まれ育った村に連れて行かれます。その村にはお父さんとお母さんがいます。大人の兵士はお母さんを子どもの前に引きずり出します。彼に向かって「その女を殺せ」と命令します。でも彼は「嫌だ」と言います。彼は銃の反対でボコボコに殴られ、「その女の腕を切りなさい。そうしなければお前もその女も殺す」と言われました。しかたないですね。彼は渡されたなたでお母さんの右手を切断します。



僕らが彼と出会った2週間前に、奇跡的に彼は母親と再会しました。彼は、戦闘中に足に負傷をし、邪魔になったため武装勢力から放り出されたところ、尋問のために政府軍に救出されたのです。そこでお母さんと偶然再会します。その時のことを僕らに、表情を変えずに淡々と語り始めました。「僕は、お母さんが僕のことをどう思っているのかすごく心配だった。でもお母さんは、僕がやってきたこと、させられてきたことを、最後まで全部聞いてくれた。すごく嬉しかった。そしてお母さんは「あんた大変だったね。苦しかったね。辛かったね」と言ってくれた。」

でも、彼は最後にもう一言だけ付け加えます。「でも、僕にはわかる。お母さんは前と同じように僕を抱きしめてくれることはない。愛してくれることもない。だって、あんなことをしてしまったから」、そう語った当時の彼の年齢は16歳でした。このような18歳未満の子どもが、いまだに25万人います。しかしそれは確認されただけで25万人ということです。なぜかと言うと、子ども兵のことを別名「見えない兵士」といいます。戸籍や住民票でちゃんと把握しているのは日本ぐらいです。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

講演前半は、子ども兵の背景にある紛争と私たちの生活についての関連と、その子ども兵に対してどのようなサポートをしているのか。また、大槌復興刺し子プロジェクト至るまでの経緯とサポートや現状について。最後に支援とは本来何か、私たちに何ができるのか、熱い思いをのせた言葉で語ってくださいました。



ひとり一人に未来をつくる力がある

認定NPO法人 テラ・ルネッサンス

私たちは、地雷・小型武器・子ども兵・平和教育に取り組むNPOです。

テラ・ルネッサンスとは

活動内容

わたしにできること



<https://www.terra-r.jp/index.html>



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 鬼丸昌也氏とのフリー・ディスカッション

岡本 | 鬼丸さん、相変わらず情熱的などともいいお話に感銘を受けました。我々の気付かない社会が抱えている問題と、我々自身の関係をもう少し認識して、微力ではあるが無力ではない、まさに微力の力をたくさん集めることによって、それが力になる。それを実現すべきだなと思います。素晴らしい活動をされていますね。

参加者 | 外務省が行ってはいけないという国へ行くという行為には、多分、両極端の考え方があると思います。何かあったら税金を使うのだから行くべきではないという正当性のある見方もできます。一方で人類という見方で見た時に違う考え方がある。両方とも言っていることは正しいと思います。問題になるのは、寄付は継続性が必要だと思うので、暴走しすぎて誰かが変な事例を作り、本当に良いことをしようとしている人ができなくなる可能性もあると思います。実際、注意して行かれると思いますが、いろいろな人の邪魔をしない、扇動をしないために、心掛けられている信念はありますか。

鬼丸 | 原則論を申し上げます。欧米、特に米国がすごいなと思うのは、いかに時の政府と反対意見であっても、自国民が誘拐をされるなど危険な目に遭った時は全力で助けます。本来それが公共だと思えます。これが原則論です。しかし日本は、変な意味の自己責任論が強い。我々はできるだけ安全を担保して、そういう地域で活動するようにしています。一つは、紛争のある地域においては、必ずどの地域がどのような治安状況であるかという情報が国連から流されています。情報を確認して、どの地域の危険度がどれくらいあるのかを、現場で確認することです。



もう一つ重要なのは、テラ・ルネッサンスの日本人スタッフとローカル・スタッフとの信頼関係です。コンゴの場合は特にそうです。コンゴの武装勢力は、農作業をして何かあった時に襲撃に行きます。通常に生活しているの、通常の間人関係があります。つまり、うちのローカル・スタッフであるコンゴ人のスタッフとも親戚の親戚であるという関係性があります。きちんとローカル・スタッフと我々スタッフとの間に信頼関係があることが、テラ・ルネッサンスのロイヤリティー。これが我々の安全担保をしてくれる。

これはコンゴの話です。元少年兵に溶接の技術を教えました。この元少年兵は麻薬を作る技術がすごく上手でした。少年兵を洗脳する時に麻薬を使います。「この油を塗ると弾に当



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

たらない」と戦場に行かせます。脱走して地域に帰ってきて溶接の技術訓練を受けている時に、他の武装勢力からリクルーティングをされました。何も仕事がない時は、お金が稼げそうなので、そのリクルーティングに乗ってしまいがちですが、その子は断りました。その時、ローカル・スタッフのリーダーが武装勢力に狙われているという情報が入ります。しかしその子が話をつけに行きました。それで安全が確保できた。

そういう地域の見えない関係性を資産として活かしていくということも安全を担保することになります。プロとして、そういうことをきちんと踏まえて事業計画していくと無茶をしない限りは危険なことではない。だから事業を永続的に担保できると我々は考えてやっています。

参加者 | 人生 100 年時代と言われ、老後を考えています。今年 NISA や iDeCo を始めました。分からないなりに続けていくうえで、お二人の話を伺いお聞きしたいです。

投資をするということと、寄付をするということに、何か共通点があるのかなと感じています。実際にどんな共通点があるのかというと、金銭的なモノと社会的な価値というところかなと思います。それぞれお二人に投資と寄付の関係についてお伺いしたいです。

岡本 | 投資と寄付はある意味非常に近い面があると思います。1971 年の入社式の時に当時の会長が「君たちはいい会社に入った」と言ってくれました。「これからいよいよ貯蓄から投資の時代が来る」という話でした。50 年近く経って、いまだにそう言っているわけでしょう。つまり、安全なものから危険なものに移るのはハードルが高いのです。結局、私は寄付から投資へという発想の方がもっと分かりやすいと思います。寄付も投資も自分が額に汗して稼いだお金を人のために用立てることです。

株主として企業への出資者になって企業をサポートしていくという感覚と、寄付をすることで何か世の中の役に立ち、困っている人を助けることはどちらも結局、他人に喜んでもらうことが自分の喜びになっているのです。ある意味、両方とも長期の時間が掛かります。そういう意味で、私は寄付を「超マネー投資」と呼んでいます。

もう一つは、自分の退職後のために経済基盤をどう構築していくかということは、若干違っている。それはもっと単純にグローバルな株式インデックス・ファンドをとにかく若いうちから積立てていく。もちろんインデックス・ファンドでやっても運用会社によって少し違いはあります。今、インデックス運用者も保有している企業に不適切な業務があればそれを正すことが重視されるようになっていきます。

ただ自分の思いを込めて個別銘柄で投資することとはちょっと違う。そこは少し切り分けて考えるべきでしょうね。個別でやる時は、私はあくまでもサテライトという位置づけです。退職後のためには、コアとしてポートフォリオをつくる。いずれにしても最終的には社会性とながっているし、自分の喜びになってくる。人に喜んでもらうことが自分の喜びになるということです。違いはそのプロセスでお金が介在しているかどうかということだけです。そういう意味では結局、大切なのは自分の幸福感です。だから「お金持ちよりしあわせ持ちになる」



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

とよく言っているのです。しあわせ持ちになることに目標を定めると、寄付も投資もそんなに変わらないことになるのかなと思います。

鬼丸 | 寄付と投資は二つだけ大きな共通点があります。どちらとも未来へ対する贈り物です。未来に対して自分の資産を贈るということが一つ。もう一つは、それがいいわけではないけれど、想像力を働かすために顔が見えたほうがいい。運用会社の特性や、個別銘柄の会社を知った方は思いがこもりますよね。寄付もそうです。テラ・ルネッサンスを応援してくださる前に、鬼丸昌也と友達になってもらえば良いと思っています。そうすればニュースの見方が変わると思います。ニュースでアフリカ特集が流れていれば、鬼丸という顎の長い人が話していたねとか。小学生はそういう感覚になります。それが中学、高校、大学になると、この前人事院で研修した官僚の中に「あの時、講演を聴いたから」と言っていました。だから、顔が見えるとか、こちらから知ろうということは、寄付や投資においては非常に重要なことなのかなという気がします。そういう特徴が両方とも共通しているなと感じています。僕も頑張ります。

参加者 | テラ・ルネッサンスさんの活動を通じて、コンゴの国が良い方向へ変っていくことがありますか。

鬼丸 | 私どもの力が微力なので、国全体のどれだけのインパクト、波及効果がどれくらいかは、ウガンダ、コンゴ、ブルンジであっても分からないところがあります。

それにはいくつか理由があります。一つは、私たちは、その対象者や対象地域の自立に重きをおいて、長い年月を掛けてオーダーメイドやオーナーシップの考え方に基づいて支援をしています。手間暇が掛かるので、対処人数を一気に広げることは難しい。ある意味そういうモデルを作って、他団体が、例えば行政が横展開してくれるようになればいいと思っています。ウガンダの中で言うと行政が似たようなプログラムを始めていますので非常に面白いと思っています。そういうこともあって、規模でのメリットが出せていないな、というところはあります。

二つ目の理由。特にコンゴがそうですが、根が深すぎる。あの広大な国を一つの国で治めるべきかどうかということも考えなければいけないくらいガバナンスが効いていない。また、国際社会の無関心さ。昨年ノーベル平和賞をムクウェゲさんという産婦人科医が受賞されて、ようやく国際的な関心がコンゴへ向けられたくらいです。それでもやらなくてはならない。やらないよりはやるべきだと思います。それが我々の信念だと思っています。

岡本 | 鬼丸さん、いつもながら熱い情熱を聞かせていただき、心が洗われる思いです。これからも活躍を願っています。ありがとうございました。